

第4回 建コンフォト大賞

あなたのお気に入りの“土木施設”

当協会では、広く一般の方々の土木施設への興味を高め、建設コンサルタントをより知っていただくために、平成21年より「建コンフォト大賞」を年1回開催しています。今回は「あなたのお気に入りの“土木施設”」をテーマに、道や橋、鉄道、上下水道、空港や港、公園や堤防など、私たちの日常生活を支える土木施設のある風景を撮影いただきました。

平成24年度も、当協会ホームページやフォトコンテストに関する情報提供サイトへの掲載、全国の公共図書館へのポスター配布などで作品を募りました。

その結果、全国の幅広い年齢層の方々から198点の応募をいただきました。

審査方法

ご応募いただいた作品は、審査委員（5名）および当協会広報委員会による審査会にて審査しました。

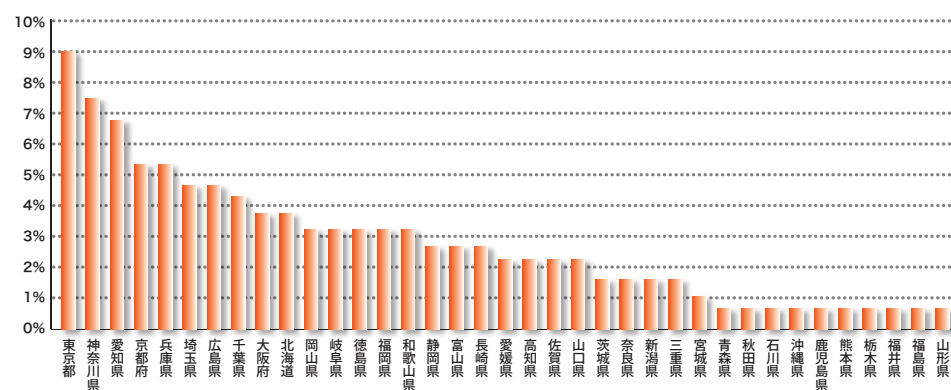
審査委員

審査委員長 伊藤 清忠（東京学芸大学名誉教授）
 審査委員 宇於崎 勝也（日本大学准教授）
 知野 泰明（日本大学准教授）
 初芝 成應（日本写真作家協会員）
 廣瀬 典昭（建設コンサルタンツ協会総務部会長）

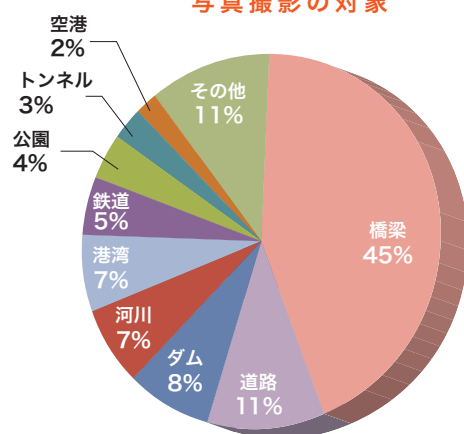
審査結果

最優秀賞1点、優秀賞2点、特別賞10点を決定しました。
 入賞作品と講評は次ページ以降に掲載するとおりです。

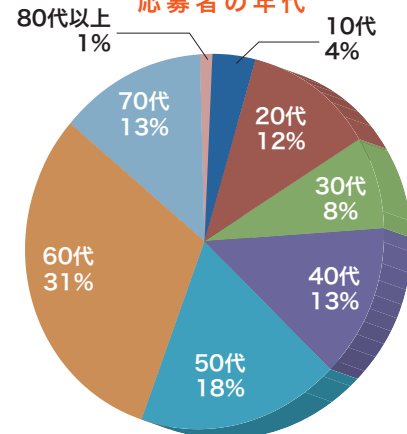
地域別の応募者



写真撮影の対象



応募者の年代



最優秀賞



「青春」 岐阜県 荻山 清和

（撮影地：長野県木曾郡南木曽町）

【撮影者のコメント】

国指定重要文化財。日本で最初のダム式発電大井ダムを建設した電力王 福沢桃介が電源開発期に架けた全長247mの吊り橋。木組みが美しい日本最大級の木橋。今も現役で県立蘇南高校の生徒が通う。主脚を全て取り込むと、橋梁が小さくなり木造の風合いが損なわれるので、横位置で木目やアーチの連続性、下校する女子高生の表情が明確な位置で切り撮ってみた。

講評

「桃介橋」は大正11年に竣工し、老朽化したが保存・活用の希望に応え復元され、通学路となりました。ユニークな主塔と高い補剛トラスに囲まれた空間は、青少年の希望と不安に向き合う空間となっている状態を的確に表現しています。（伊藤審査委員長）

毎日渡るお気に入りの通学路。整然と並んだ木造の部材が奥行きやたおやかさを醸し出しています。土木構造物が持つ美しさをうまくとらえています。（宇於崎審査委員）

国指定重要文化財「桃介橋」。荒廃し渡れなくなった木橋は、綿密な考証の下、1993年（平成5年）に復元されました。1922年（大正11年）年当時のスケールは通学する高校生達を小学生の様にも見せるところが面白く感じます。（知野審査委員）

欄干のラインが美しい吊り橋に、下校途中傍らの女性にカバンを持たせ、自分はタオルを肩に掛けウチワを手にして涼をとって歩く後姿が滑稽で、趣のある木の吊り橋が醸し出すローカルな心地よさが伝わってきます。（初芝審査委員）

つり橋形式の古い木橋という土木遺産的な珍しい素材と、それを通学路として当たり前に使っている女学生の自然な振る舞いがいい対称となっています。この町の落ち着いた中に活力を感じさせる作品です。（廣瀬審査委員）



「ダム放水」

岐阜県 堀 英子

(撮影地：岐阜県揖斐郡揖斐町徳山)

【撮影者のコメント】

徳山ダムの放水。魚のうろこのように見えます。面白い流れをしています。
5月の連休に10分間だけの放水です。

講 評

10分間の放水を逃さず、放水の先端が明確で、放水全体の形・色や、うろこ状の形・色も把握しています。撮影位置、シャッターチャンス、シャッタースピードも的確です。(伊藤審査委員長)

放水の瞬間、勢いよく飛び出した水の流れが段々に重なっています。水流はこのような形を見せることもあります。めったに見られないお気に入りの場面をよく捉えています。(宇於崎審査委員)

魚紋、あるいは風紋かのように見せるのはダムから滑り落ちる水たちです。白砂が生み出したかのような紋様が不思議です。(知野審査委員)

ダムの放水のシャッターチャンスを見逃さず、放水の時間が迫る緊迫の一瞬を捉えてカメラを構えた心境が手を取るように伝わってきます。結果は見事芸術的な波紋を描いている模様を撮った傑作です。(初芝審査委員)

傾斜水路の特徴的な流水表現であるうろこ状の紋様の一瞬をうまくとらえた作品です。ダムの余水吐から放水されている場面はよく撮られていますが放流開始の一瞬の表情をこの角度からとらえた作品は珍しいです。(廣瀬審査委員)



「静 寂」

山口県 三浦 秀貴

(撮影地：山口県周南市長田)

【撮影者のコメント】

土木施設としては、あまり目立たない存在ですが、ここは気に入っている場所です。
ひっそりと佇む波止場をイメージして撮りました。
昼間に撮影したのでは静けさが表現できなかったため、月明かりの夜に撮影し、静けさを表現しました。
波の音しかなしい夜でしたが、心が落ち着く様な空間でした。

講 評

月明かりで醸し出された得も言われぬ美しさ、佇み浸りたい夢のような景観を、静かな感動を込めて穏やかに表現しています。空・海・丘・山・灯火の静けさと、石の質感・防波堤の力強さの対比が効果的です。(伊藤審査委員長)

鏡のような滑らかな海面に、それを二分するような波止場。「静寂」というテーマがまさにふさわしい。心を穏やかにさせる風景に感動します。(宇於崎審査委員)

象の鼻のように伸びる石波止場が、月明かりの下で神々しく輝きます。醸し出される静けさは、荒波に耐える波止場の力強さを称えているかのようです。(知野審査委員)

波一つ無い湖面のような静けさが漂い、遠くで照らす光も海面は全く揺れることなく静寂を保っています。一たび荒れる海ともなれば頼もしい巨大な恐竜の背中のごとく防波堤も出番となるでしょう。技術的に高度な作品です。(初芝審査委員)

静かな海面に長く伸びていく突堤が落ち着いた色合いで表現されています。この静けさが、かえって本来の役割を果たしている荒天時にはどんな表情をみせるのかといった想像を掻き立てせます。(廣瀬審査委員)

特別賞



「憩いのダム公園」

北海道 青山 弘志

(撮影地：北海道函館市赤川町)

【撮影者のコメント】

このダム公園は春は桜、秋は紅葉と市民の目を楽しませてくれます。この日は早朝から公園で紅葉を楽しんだ後、ダムの近くの噴水から水が吹きあがる時間に合わせて近くにいてみると、吹きあがった水に太陽が反射して「虹」が出ておりました。この美しい光景に夢中でシャッターを切りました。

講 評

虹と共に現れる白い楼閣。そんな伝説の主役にもなれそうなバットレスダムは、近代技術の語り部。周囲の自然に溶け込むダムデザインが美しいです。



「スクラム組んで」

新潟県 藤田 繁夫

(撮影地：新潟県新潟市西船見町)

【撮影者のコメント】

荒波打ち寄せる日本海側に暮らす者にとって、消波ブロックは身近な存在だ。海に沈められ、防波堤となった景色はよく見るが、これほどに、整然と並んでいることはあまり見かけない。信濃川河口に近い砂浜で作っていたので、道を挟んだ少し高台から撮影した。施工を前に、あたかも、これからの任務に向けて皆でスクラムを組んでいるように見えた。

講 評

新品の白い消波ブロックが、題名通りスクラムを組んで出を待っているようです。スクラムを組んで出を待つ新品の白い消波ブロック、数年間波の浸食に対峙し変化した古い消波ブロック、海の青の対比も効果的です。

特別賞



「温水路」

秋田県 大場 建夫

(撮影地：秋田県にかほ市)

【撮影者のコメント】

上郷地域は島海山からの疏水で水量は多いのですが、水温がとて低く冷水障害で稲作の収量は年々減少していたそうです。そこで昭和初期に発電所の設置を機に日本で初めて造られたのが上郷温水路といわれています。水深は浅く、水を攪拌して下流に流し2〜3度上がった水を水田に入れている。

講 評

階段状の水路が非常にきれいな景観を作っています。撮影者のコメントにあるように地域の農業にとっては、なくてはならない機能を持った温水路ですが、それが自然に溶け込んだ特徴的な景観を作っていることが感動的でもあります。



「今も現役」

岡山県 藤森 保男

(撮影地：岡山県岡山市妹尾)

【撮影者のコメント】

今も地元の人達に使用されている石積の井戸がめずらしくて撮りました。

講 評

堅固な石組みで造られている井戸はよく見ると梯子も付いており、井戸廻りは傾斜で溝も作られ水回りを良くしています。当時の土木技術で掘られた古井戸に腰を屈めて水汲みする姿「今も現役」が印象的な作品です。

特別賞



「火山との共生」

鹿児島県 山田 宏作

(撮影地：鹿児島県垂水市)

【撮影者のコメント】

大雨のたびに不通になっていた国道220号の迂回路として建設された牛根大橋の風景です。夜になると桜島の火映（噴火）が湾に映り、この桜島の避難道としても、観光資源としても期待されています。

講 評

大自然が生み出す雄大な姿、桜島の噴火とふもとに広がる都市的風景。橋や道路が煌々と輝き、自然と人工の光の対比が美しい作品です。



「対 峙」

愛知県 西村 龍人

(撮影地：愛知県名古屋市)

【撮影者のコメント】

この水門は緑地公園と川に挟まれており、普段は何気ない風景を構成する一部分に過ぎませんが、川の増水時にはここから水が流入し公園全体が遊水池となる仕組みになっています。そのことを幼い二人はおそらく知らずに、ただ興味のままだと近づいたのだと思います。そんな二人の強い好奇心と冒険心、そしてそれを悠然と受け止めているかのような水門の姿に、見慣れた風景とは違った劇的な物語を感じました。また、水門の上に留まっている二羽の鳥が二人を見ているようです。

講 評

何の変哲もない水門ですが、左下の二人の子供が水門を見上げている構図が面白いです。この巨大な水門から、彼らは何を感じ、何を考えているのかといったことを想像させます。全体のモノトーン的色調も印象的です。

特別賞



「協 演」

東京都 田川 潔

(撮影地：東京都中央区)

【撮影者のコメント】

石造二連アーチの日本橋とゆるやかな曲線を右に描くコンクリート造りの高速道路。新旧の土木構造物がゆっくりと半世紀の時を経て、都市の景観にすっかり溶け込んでいました。夏の日没直後のマジックアワー、ちょうど橋に明かりが灯され、川面の表情も賑やかになり、二つの橋がとても妖艶な表情を一瞬見せたところを切り取りました。撮影場所は日本橋船着場で、二つの橋を下から見上げるアングルで撮ることができました。

講 評

良く知られる日本橋と頭上に覆う形の高速道路は撮影の対象になりませんが、ライトアップされた日本橋は生き返った如く光を放ち川の水もライトに照らされて川面に色どりを添え、高速道路の橋脚もきれいに写しだしています。



「念願の大橋」

富山県 原口 裕

(撮影地：富山県射水市新湊地区)

【撮影者のコメント】

待望の新湊大橋が、平成24年9月23日に開通しました。臨港道路富山新港東西線の総延長はアーチ部分も含めて3.6km（うち新湊大橋は600m）、橋を支える主塔の高さは127mで、海拔およそ50mの所に車が通る2車線の道路があり、その下に自転車と歩行者の道路もあり日本海側最大規模の斜張橋です。この新湊大橋の開通により、富山新港の開港から40年以上にわたって分断された港の東西地域がつながり車は大回り、住民は渡船で渡る不便な生活がなくなります。この写真は、開通一日前に道路が解放されて多くの人が、念願の大橋を渡る様子を撮影しました。

講 評

射水市新湊地区に開通した新湊大橋。待ちにまった多くの住民が開通前日に渡り初めをしています。これからこの橋が生活を支えるお気に入りの風景となることを想像させる作品です。



「恐竜橋の下で海釣り」

東京都 能登 正俊

(撮影地：東京都江東区若洲)

【撮影者のコメント】

恐竜橋とは今年（2012年）2月に開通した東京ゲートブリッジのことです。江東区若洲と中央防波堤を結ぶ全長2,618mの橋です。橋の下は海釣り施設があり休日は賑わいます。東京ランドマークの一つとなり、観光スポットとしても人気のあるところですよ。

講 評

東京ゲートブリッジと対照的な色・形・用途の海釣り施設の対比が見事です。東京ゲートブリッジは、航空機の飛来に配慮した独創的な形であることを、航空機を入れることにより表現しており、航空機も良い位置で捉えています。



「今までありがとう。」

奈良県 石川 達也

(撮影地：宮城県気仙沼市本吉)

【撮影者のコメント】

私は、宮城県気仙沼市でボランティア活動をしています。気仙沼市は津波の被害が大きく、あらゆるものが流れてしまいました。ボランティア活動中、出会ったのがこの高架です。津波によって壊れてしまった高架を見て、「今まで多くの人の生活を支え、様々な出会いをもたらしてくれてありがとう。そして、これからもよろしく。」と伝えた時の写真です。

講 評

大震災の記憶となるモニュメントは日々、消えつつあります。こうした中で土木技術者たちの心に留まった一枚です。

【入賞作品マップ】

